

## はじめに

学校臨床総合教育研究センター長 汐見稔幸

本書は、学校臨床総合教育研究センターの2002年度の研究活動報告書です。

学校臨床総合教育研究センターは、相談援助部門と研究開発部門という二つの部門から成り立っています。相談援助部門は、学校の中に臨床的な対応が必要なケースが増えているという基本認識のもとに、臨床心理学的ディシプリンをベースにして学校臨床の学問的な確立を目指して学際的に活動している部門です。研究開発部門は、2ないし3年を一区切りとするプロジェクト研究を基本的なスタイルとしているこれも学際的な研究部門で、テーマは現実の学校が切実に抱えている課題の中から選択しています。2000年度から2002年度までは3年計画で「学力低下」の実体解明と改善方策に関する実践的研究プロジェクトを立ち上げました。本年度はそのまとめの年度にあたっています。

プロジェクト研究の方は、内部の研究会および公開研究会を適宜開催し、同時に独自の学力調査を関西圏と関東圏で行い、その結果の一部を一般メディアにも発表してきました。学力調査の結果の詳細は、『学力低下の実体解明(その1)』および『学力低下の実体解明(その2)』という報告書を参照いただきたいと思います。本報告書には2002年10月26日に開催された本年度の第2回プロジェクト研究会における報告と、同じく2002年12月7日に東大附属学校で開催された「『学力低下論』を超えて—これからの学力を育てる学校づくり—」と題したセンターの公開シンポジウムでの報告を掲載しています。

報告の中心になっているシンポジウムには、多くの協力研究員の方々の参加をいただきました。当日は当センターからの報告だけでなく、関西圏の学力調査に協力して下さった松原市布忍

小学校教諭の瀧澤公子氏、および品川区教育長の若月秀夫氏、そして犬山市教育委員会の学校教育部長の加地健氏に報告していただきました。おかげで実りのあるものになったことをこの場を借りて感謝致します。残念ながら紙数の関係で、討論部分が掲載できなくなったことをおわびします。

本センターが指摘し明らかにしてきた学力形成上の諸問題の認識をふまえて、新しい学校づくり・教育づくりへの次のステップのためのテーマを多様な角度から探っていただければ、プロジェクトの使命は果たされたといえるでしょう。

他方の相談援助部門では、今年度は、とりわけ東京大学教育学部附属中等教育学校におけるセンター分室の活動と、市川伸一教授が中心になった「学習相談」の取り組みに力を注いできました。これらは、当相談援助部門の具体的フィールドというべきものですが、併せて附属学校との協同関係を発展させるための活動です。本報告書には、今年度二回にわたって行われた附属学校とセンターの懇談会の報告と討論の一部を掲載しました。これは附属の生徒たちの生活支援と学習支援の二つの分野を中心になって担当した亀口教授と市川教授の報告が中心です。報告書にはセンター分室の活動報告も載せています。

2004年度からの法人化への移行、臨床心理コースの新設の可能性という新たな動きのなかで、当センターは大学に課せられた使命を果たすべく、引き続き社会の中で教育研究が果たさねばならない課題を追求していきたいと思えます。引き続きご協力のほどお願い申し上げます。